



スポーツボランティアの魅力 —それは「母は遊びます」から始まった

子育てが一段落し、
改めて自分と向き合ったときに
出会ったスポーツボランティア

子どもが大学生になった頃、毎日のように「何時に帰ってくるの?」「夕飯はうちで食べるの?」と尋ねる日が続いていました。帰りが遅いとイライラして「どこへ行ってたの?」と問い詰めてしまう。

ある日、子どもから「ストーカーみたい」と一言。「こっちは心配して訊いているのに!」とムツとして、「お母さんも遊びに行けば?」と言われ、ハッとしました。それを機に「子を信じて見守る母親になろう」と気持ちを切りかえ、「母は遊びます」と家族に宣言しました。とは言っても、じゃあ何をやるか? 仲のいい友だちはまだ子育て中だから、誘いつらいし。

そこでまず、家族に向けていた目を、自分に向けてみました。すると、年齢を重ね、

体重も体型も変化していることを実感。「ダイエットだけではなく、体力づくりのために運動を始める必要があるな」と気づきました。

その頃、隣の県でマラソン大会が開催されると知りました。私は学生時代、陸上部で中距離や高跳びをやっていた経験もありましたし、秋の気持ちのいい季節に海辺を走るというのも魅力的です。さっそく、そのマラソン大会にエントリーしました。

大会当日はとてもお天気がよくて、最初は気持ちよく海辺の道を走り出したのですが、徐々に足が動かなくなってきました。そのうえ日差しがきつく、帽子もなく、もつとUV効果の高い日焼け止めを塗るべきだった。と、あらゆる面での準備不足を反省しながら、ふらふらと走っていました。もう一生、たどりに着くことはないのかというくらいゴールが遠い。



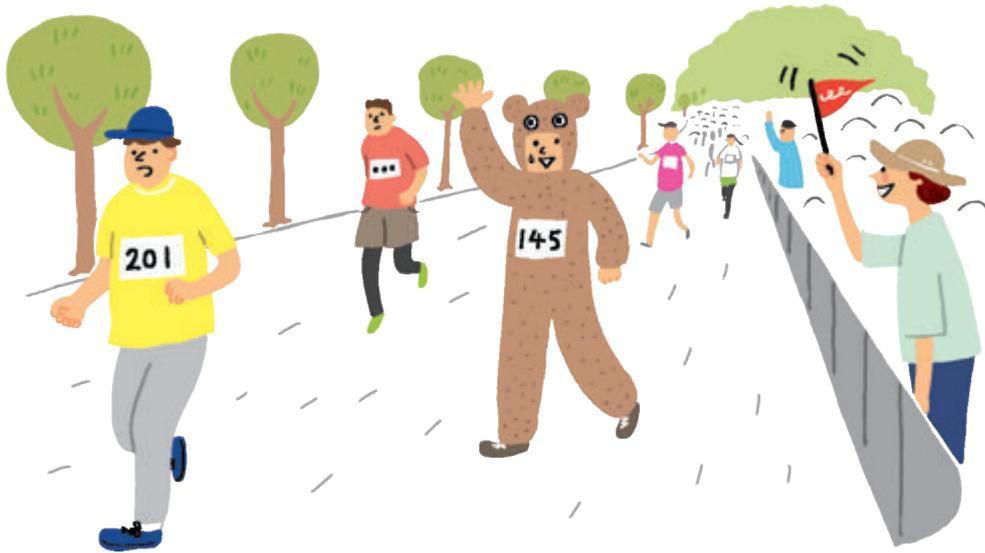
伊丹 まどか

【いたみ・まどか】

東京生まれ。旅行会社勤務後、1年間オーストラリアで働きながら語学学校に通う。大学生協パートタイマーとして働きながら、日本スポーツボランティアネットワーク・日本障害者スキー連盟事務局ボランティア活動を行う。

「途中棄権」の4文字が頭をちらついていたとき「頑張つて!」「あともう少し!」という声が聞こえてきました。ハッと顔を上げると、沿道で応援してくれる人たちの姿が目に見え込んできました。その声が力となって、止まりかけていた私の足が前に出たのです。声援に背中を押してもらって、制限時間は大幅にオーバーしたものの、どうにかゴール。その達成感といったら、なんとも言えず、気持ちのいいものでした。

大会後、声援を送ってくれたのはスポーツボランティアの方たちだったと知り、「こういう形でもスポーツに関わることができるとか。だったら私もやってみよう!」と、俄然興味。そう言えば、給水所でニコニコと水を渡してくれる年配の方たちがいたけど、彼女たちもボランティアだったのか…。ボランティアだったたら年を重ねてもできるし、私も、あんなふうにならなくてもイキイキ



と笑っていたいな、と強く思ったのです。マラソン大会のデビューから数日後、駅で1枚のポスターを見つけました。都内で開催される大きなマラソン大会のボランティア募集のポスターでした。「これだ！」と思った私は、迷わずエントリーしました。スポーツボランティアとして初の仕事は、

「ナンバーカード」と呼ばれるゼッケンを渡すこと。大会前に3日間をかけてイベント会場で行われます。集まってくる出場選手たちの本人確認をして、大会概要を説明した後に「楽しんできてくださいね」と声をかけてナンバーカードを渡しました。

大会当日は沿道に立つて「あと〇キロ、もう少しですよ!」「ナイスラン!」「ファイト!」と声をかけ続けました。着ぐるみを着たランナーに「アンパンマンカッコイイ!」「スパイダーマンガンバレ!」などと声をかけると、手を挙げて応えてくれて、こちらも楽しい。声かけの大切さは自分自身がマラソン大会に出場した際に実感していました、少しでもランナーたちの力になればと思つて、精一杯声を上げました。

年齢も肩書も関係ない! 日常生活では得られない 人間関係が築けることも

私は特定のチームには属さず、個人でスポーツボランティアの活動をしています。情報をインターネットで検索して自分のスケジュールと合えば、大会ホームページからエントリー。多い年は年間10大会、実際に20日ほど。活動内容は、案内・誘導・受付・販売など、競技によってさまざまです。

他のボランティアの方たちとの出会いも楽しみの一つ。日常生活では、職場や子どもとの学校関係などの限られたコミュニティの中で、価値観が合う人ときあつていますが、ボランティア活動の場では初対面の人と、朝

から日が暮れるまで共に過ごします。一緒に活動する人がどんな肩書で、普段何をやっているのかも知りません。学生さんであれば、年配の方もいます。毎回の出会いがとにかく新鮮で、とても魅力的なのです。

どの大会でも同じチームの方と顔を合わせるのは当日の朝。リーダー1人に対し、メンバー20人くらいのチーム編成です。最初にリーダーから注意事項の説明があり、その後、それぞれのこれまでのボランティア経験をもとに4〜5人の小グループを作ります。

ある大会で私は給水を担当しました。テーブルを並べて、「給水」と書かれた紙を並べて、水を注ぐ。単純作業ですが、数が半端ないし、要領よくこなさなくてはなりません。一刻も早く準備を始めたい。でも交通規制の関係で、開始時間ギリギリになるまで車道にセッティングできません。「今のうち休憩しておいてください」とリーダーに言われても、気持ちが焦っているため本気で休憩などできず、とりあえずトイレを済ませ、戻ってきたら経験者の方からやり方を教わり、担当を振り分けます。

ペットボトルのダンボールを各テーブルに振り分ける係、ペットボトルの蓋を開ける係、紙コップ並べる係、注ぐ係、空になったペットボトルを潰して回収する係、空いた台車やダンボールを回収する係、ランナーが捨てる紙コップ用のゴミ箱を作つて設置する係など、役割はさまざまです。

いつも紙コップを3個重ねて3階建てタ



ワーにするのですが、紙コップの間に挟む
台を清潔に拭くなどの細かい気配りも忘れ
てはいけません。しかも季節や天候によつ
て状況は変わってくるので、すべてマニユ
アル通りにはいきません。

多少の雨ならまだマシで、最悪なのは風
が強い日。セットした紙コップが飛ばされ
ないようと、1人が思いきり両手を広げ
て並べた紙コップを風から守り、その隙間
から、別の人が水を注ぐ。この作業は、チ
ームワークが必要とされます。入れる水の
量は紙コップの3〜4割程度。これはラン
ナーが走りながら溢さず飲める量のため
です。そのあたりは大会の出場経験者のアド
バイスがとても役立ちます。きれいに紙コ
ップの3階建てタワーが完成したときには、
ホッとすると同時に達成感がありますが、
本当の闘いはランナーが来てから。

その大会で、私のチームに3人組の男子
大学生がいました。そのうち1人は初対面
同士の小グループに分けられたとき、困惑
の表情を浮かべました。自分の仲間3人で
活動できると思っていたのでしょうか。年齢
の離れたメンバーと接することに戸惑いが
あったようで、メンバーが何かを尋ねても、
別のグループにいる自分の仲間の顔を見て
確認してから答えていました。

私の子どもと同年代の彼。「きっと核家族
の中で育って、彼にとって年配の人と言え
ば学校の先生やバイト先の上司以外はない
のかもしれないなあ」と思っていて見えました。

でも、大会が始まってしまえば私も他の
メンバーも彼のフォローをしている余裕は
ありません。

無事に大会が終わり、最後のミーティン
グで、彼はボソッと「朝は、知らない人と一
緒に活動するなんて自分にはできないと思
っていたのに、できてびっくりした」と言い
ました。それは、最初の戸惑いがなくなる
ほどに彼自身も一生懸命活動したし、チー
ムもしつかり機能していたという証。私は
その言葉が嬉しかったし、よかったと思いま
した。あのとときの感情は今でも忘れられま
せん。

仕事や地位や年齢に関係なく、同じ目標
に向かって意見を出し合い、皆で、大会の
成功、という一つのゴールを目指す。こんな
経験は日常生活ではなかなか味わえません。

**心の充実、達成感、前向きな気
持ち、生きるパワー…。ボランティア
活動を通して得られたもの**

スポーツボランティアのほかに農業ボラン
ティア、震災ボランティアの活動もしていま
す。農業ボランティアは山梨のぶどう農家
にお邪魔して、間引き・袋かけ・収穫作業
などのお手伝いをします。スポーツボランテ
ィアのような華やかさはありませんが、山に
囲まれて雲の流れを見ながらの作業に癒さ
れますし、自然からパワーをもらっています。
震災ボランティアでは、石巻で牡蠣の養殖
場のお手伝いをしたこともあります。

日頃はごみごみした街なか暮らして、仕

事もパソコンと向かう事務仕事。仕事の指示もメールで届くような日々です。そんな日常から離れ、自然と触れ合うことで自分自身がリセットされますし、エネルギーがチャージされます。いまや私にとって、ボランティアは生活と切り離せないほどです。

「せっかくの休日なただから、ゆつくり休めば？」という声もあります。でもたとえば、釣りやゴルフなどの趣味があつたら、休日に出かけますよね？ 私にとってボランティア活動はそれらと同じ感覚。以前、釣りに出かける夫に「釣れないのに行く意味があるの？ 魚なら買えばいいじゃない」と言ったことを、今ではとても反省していません。周囲から「無給で働くの？ 信じられない」と言われることもありませんが、ボランティア活動をしている間、私の中に働いている感覚はありません。好きな空間で、仲間たちと楽しんでいる感覚です。むしろ、お金を得るよりもはるかに大きなものを持っていると感じています。

何がこんなにも私の心を動かすのか。自分でも明確な答えはわかりません。ただ、スポーツボランティアをしていると、単なる観客として声援を送るのは違った感覚があります。選手との一体感^①と言うのでしょうか。選手でもないのに、時期が来るとソワソワし始めます。

ボランティアに参加するときは、事前に活動内容や目的地までのルート、天気予報をチェック。朝、家を出てから帰宅するま

で1日好きなことをやって帰ります。とてもリフレッシュできますし、充実した気持ちになれます。ボランティア活動を通じていろいろな地域に行くと、いつも新しい発見ばかりでドキドキの連続です。

大会のスケジュールに合わせて自分自身の健康管理もしっかりするので、以前に比べ体力がつきまじり、何より考え方が前向きに。日常生活で困っている人を見かけると、以前は声をかけたたくても「かえって迷惑だったらどうしよう…」とためらうこともありました。でも今はすぐに声をかけますし、断られても気にしなくなりました。家族は「楽しそうでよかったね」と応援してくれます。今は社会人になった子どもも、私が以前より生き生きしている姿を見て、安心しているかもしれません。

家と職場の往復だった頃と比べると、視野が格段に広がったと実感しています。スポーツボランティアの一番の魅力は、やはり「自分が競技者でなくてもその競技に関われること」。一生懸命戦っている競技者と同じ空間にいて、その場の雰囲気と共有できる喜びは何ものにも代えがたいのです。選手の方々へのリスペクトが増えましたし、自分が大会に出場するときも、運営側の視点を持つことができるようになったので、参加する楽しみが何倍にもなりました。

自分がボランティアとして参加したときに選手から「ありがとう」と言われると何よりも嬉しいので、自分が選手として出場

するときもスタッフには必ず感謝の気持ち伝えるようにしています。

子育て中は、自分がスポーツの競技や大会に関わることなどまったく想像していませんでした。でもボランティアなら、スポーツができなくても、たとえ身体に何かハンディがあつたとしても、いろいろな方法で関わるすることができます。

最初は「こんな自分が役に立つのか。単なる自己満足に終わってしまうのでは？」と不安でした。でも専門的なスキルがなくとも研修やボランティア説明会などに参加して準備をすれば大丈夫だし、当日はリーダーや先輩ボランティアの方々がサポートしてくれたので、1人で参加してもすぐにその場の雰囲気になじむことができました。私も初めて参加する人が参加しやすい雰囲気づくられるように、と心がけています。

来年はいよいよ東京でオリンピックが開催され、世界中の人が日本にやってきました。さまざまな国の人と交流する中で、1人でも多くの方に「日本っていい国だな」と思ってもらえたら嬉しいのです。今から2020年が楽しみでなりません。

人と人が繋がると、世界が広がり、人生が豊かになる気がします。今後はさらに語学を勉強し、活動の幅を広げ、世界中のたくさんの人とコミュニケーションをとって一体感を味わいたい。見たことのない景色を見てみたい。ボランティアを体験すればするほど、さらに楽しみが増えていく日々です。